

背景・総論



日本社会の内なる**グローバル化が進展**し、**少子化・人口減少**が進む中、一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重する**共生社会の実現が不可欠**。



学校教育においては、**多様性を包摂**し、一人一人の意欲を高め、**可能性を開花させる教育を実現**することが喫緊の課題。**誰一人取り残されず**、相互に多様性を認め、高め合い、**他者のウェルビーイングを思いやる**ことができる**教育環境を整備**することが求められている。



ストレングス・アプローチの考え方の下、全ての子供たちが持っている「**長所・強み**」に着目し、**可能性を引き出して発揮**させていく**視点（エンパワメント）**を取り入れることや**多様性の尊重によるマジョリティの変容**も大切。

地域・社会



学校全体が多様性を包摂し、多様性を強みにできるように
～子供たちが安心して過ごせる多文化共生（インクルーシブ）な学校づくり～



子供たちを支える**大人**が子供たちの可能性を引き出せるように



全ての**子供**が豊かな可能性を開花できるように

指導内容の深化・充実に関する議論の整理

1. 資質・能力を育成するための「日本語指導」の再定義

- 日本語指導のための特別の教育課程が義務教育段階（平成26年度～）及び高等学校段階（令和5年度～）で制度化されて以降、着実に活用が進み、一人一人の教師や支援員等の日々の試行錯誤や創意工夫により、子供たちの学びが支えられてきた。
- 初期指導等での漢字や文法等の習得に止まらず、児童生徒が自ら日本語で教科を学び、資質・能力が身に付くよう、日本語と教科の統合学習による質の向上が課題。このためにも、日本語と母語の力を活用した『知識及び技能』と『思考力、判断力、表現力等』の一体的な育成が特別の教育課程の目的であることを明確化する方向で再定義し、学校教育法施行規則等の規定の改正が必要。

2. 多様性を包摂する学校教育・在籍学級での学びの在り方

- 子供の持つ多様性を「長所・強み」として生かす視点は、外国人児童生徒等のみならず、全ての子供たちの可能性を開花させていくためにも重要。学校全体が多様性を包摂し、多様性を強みにしていけるよう、ユニバーサルな視点での学級づくり・授業づくり等、具体的な方策※1を検討していくことが求められている。
- （※1 例：多層型支援システム、在籍学級と特別の教育課程の学びの連続性・知見の相互共有 等）
- 外国人児童生徒等が自己肯定感を育みながら、学びに向かい、安心して学校生活を過ごし、豊かな日常を過ごすためには多言語・多文化を尊重する環境づくりが重要であり、他の児童生徒にとっても、異文化理解や多文化共生について考えを深める機会となる。

3. 児童生徒の様々な「力」を引き出し、効果的な指導を行うための方策の検討

- 外国人児童生徒等教育に初めて携わる教師を含め、全ての教師や支援員等が資質・能力を育成するための指導を体系的・専門的に実施するとともに、多様性を強みにできる学校づくりを目指していけるよう、その考え方や指導内容・方法等を含めた全体像を示す必要がある。その際、指導における具体的な指標を明確にするとともに、そのためにことばの教育として教える内容や多文化・多言語の児童生徒の特性等も踏まえて留意すべき事項※2については、今後さらに検討を進める必要がある。
- （※2 例：実態把握、心理的安全性の確保、来日期间等を踏まえた配慮事項、「ことばの力のものさし」の活用、学びの連続性（幼小中高～生涯学習）、障害がある子供への支援、キャリア支援）
- 加えて、学校では対応困難な母語の力を引き出すことを含め、会話・翻訳・読み上げ・ルビ振り等での生成AI等のデジタル技術の活用や、日本語指導が必要のない児童生徒への応用も含めた、教科学習での学習語彙の活用について、具体的推進方策を検討すべきである。

4. 指導体制の充実に向けて

- 日本語と母語の力を活用した資質・能力を育成するための指導を実施していくに当たり、指導体制の充実是不可欠。とりわけ日本語指導補助者・母語支援員の一層の配置促進や教師との効果的な連携に向けて、実態把握や具体的な連携の在り方等を示していくことが急務。
- 多様性を包摂する学校づくりに向けて、学校全体の受け入れ体制を検討していくに当たり、教師や支援員等の外国人児童生徒等教育の専門性の向上や外部機関との連携等に関し、更なる議論が必要。

1. 全ての**子供**が豊かな可能性を開花できるように

- 就学機会の確実な確保、就学の促進
- 子供たちの様々な「力」を引き出しながら、一人一人の豊かな可能性を育む教育の実現
 - 子供たちの「多様性」の把握・困り事や悩みに寄り添う姿勢・「長所・強み」を引き出す視点
 - 子供たちの資質・能力を育むための、母語の力の活用も含めた日本語で学ぶ力の育成(デジタル技術の活用等)
 - 在籍前の経験・学習歴の活用や学校外の日常生活等との接続
- 希望する進路・生き方を自ら選択できるためのキャリア教育・支援
- 幼小中高の学びの連続性、学び続ける生涯学習の視点



2. 子供たちを支える**大人**が子供たちの可能性を引き出せるように

- 各地域の実情を踏まえた子供たちの受け入れ・支援体制の整備
- 各専門分野の知見の活用、外国人児童生徒等教育の専門性の向上
- 校内の連携・共通理解の醸成(教師と日本語指導補助者・母語支援員等との連携等)
- 家庭・地域・関係機関との連携



3. **学校全体**が多様性を包摂し、多様性を強みにできるように

～子供たちが安心して過ごせる多文化共生(インクルーシブ)な学校づくり～

- 子供たちが共に学び合える環境づくり
 - 異文化理解・多文化共生の考え方に基づく教育の更なる推進(国際理解教育の推進等)
- 多様性をポジティブに捉え、日本と世界の架け橋となるグローバル人材育成の視点
- 外国人児童生徒等教育で培われた知見と他の児童生徒への教育で培われた知見の相互の応用

